

たる尾張士なる平野甚右衛門が一族なる事著明也。然らば彼の甚右衛門坂にて戦死せし甚右衛門の子孫なりとの傳説は、全く後人の附會より起りたる説なるべし。

金澤古蹟志卷五

城郭諸曲輪下

○鶴丸

此の曲輪は、本丸と三丸との間なり。有澤武貞の金澤細見圖譜に、鶴丸は鶴の下り居たるを芳春院君御覽ありて、甚だ悦び給うて名付けらるといへりと。三州志來因概覽附録にも、鶴丸は此の所に鶴の下りて立つを、芳春君見給ひ、是を壽し名づくと云ふ。とあり。金城深秘録には、鶴の下りたるを壽福院殿御覽じて悦び給ひ名付け給ふよし。といへり。兩説いづれか正説ならん。按ずるに、鶴丸の名は、實に諸曲輪中の嘉名なり。倭姫世説に、昔垂仁天皇の御世、伊勢國佐々牟江宮の前なる葦原に鶴の居て、八百穂の稻をくはへ捧げ持ちて鳴きけるを、倭姫命歡び給ひて、其の鶴の居たる處に、八握穗神田社を造立し給ふよし見たり。是吾が皇國にて、鶴をことほぎける事の始めならんか。甲

斐名勝志に、甲斐國都留郡都留郷は、鶴川の邊なるべし。

今鶴川驛・鶴鳴等の地名ありて、此の邊に往昔より鶴住めり。此の地邊鶴の郷ならんと云ふ。夫木集に、

雲のうへに菊ほりうゑて甲斐の國 長 家

鶴の郡をうつしてぞ見る

此の歌の註に云ふ。風土記曰。甲斐國鶴郡有菊花山。流水洗菊。飲其水入。壽如鶴。云々。平次按ずるに、芳春院君は古今傳授をもし給ひ、歌學に長じ給ふなれば、右等の故事を思召し、鶴丸とは名付け給ひたるならんか。

○鶴丸便殿

慶長の頃は、鶴丸に便殿ありて、贈大納言利長卿居給ひたりしと見えて、聞見雜錄に、太田但馬を御成敗の事五月十四日朝也。御城鶴丸にて横山山城守に被仰付。但馬爪のあかをとり有之處を、山城上意とて、但馬が頸、左の方を初太刀に切る。但馬が太刀、山城着物、鼻紙かけて切れ、身に不中。勝尾半左衛門内々此の事を知るに依つて、戸の外に有之。但馬山城を切るとのびたる時、横あひより聲をかけて、胴をきる。但馬よりむきなぐる太刀、半左衛門を